
ハイスクールD×D～紅蓮の錬金術師～

人間花火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイスクールD×D〜紅蓮の錬金術師〜

【Nコード】

N4373BA

【作者名】

人間花火

【あらすじ】

兵藤一誠の親友、時風篠がゆくファンタジーバトルアクション！！
カッとなってやった、反省はしているが後悔はしていない（キリッ
あまり叩かれすぎるとホコリどころか涙も出てきてしまいます（泣）

はじめに

わたしは人間花火《にんげんはなび》と申します。

処女作なので。生温かく見守ってやってくださいお願いします。

このページの使い方もよくわかりません（泣）

勢いでやってしまいました（汗）更新亀になるかもしれません。あと誹謗・中傷勘弁してくださいね。

皆さんが描いた小説を見みるとすごくレベル高いなあと思いました。公開処刑ですね、分かります。

あと原作頑張って読めますがしばらくテレビアニメ扱いになるかしれません。

ではお粗末かと思いますがよろしくお願いします。

主人公設定

名前…時風 篠

武術…主に父親に叩きこまれた軍隊格闘術を使う。

装備…多種多様の錬成の定義がされた布。

錬金術…右手に硫黄の錬成陣、左手に水銀の錬成陣を持つ。更に手首に巻くように錬金術の輪になるものが刻んであり、構築式は指の腹に書き連ねてある。地面・金属系の元素定義が為されている。他にありとあらゆる錬成陣が記してある布を何枚も持っているため必要に応じて適した布を取り出し術を行使する。

性格・容姿…長い黒髪を後ろで一つに束ねたイケメン糸目。普段は敬語だが真面目になったり怒ると目が少し開き口調も変わる。現役軍人でいるためか非常時にもナチュラルに対応できる。変態紳士。争い事は嫌う。17歳のくせに全てに於いて達観している。

身元…両親ともに軍人。自分が軍人であることを隠して学校生活を送っている。

親友である一誠しかこのことを知らない。

戦闘傾向…基本拳闘で闘い、必要に応じて錬金術（主に兵器、爆弾錬成）を役とする。

得意…料理、スポーツ（戦闘）、駆け引き、諜報活動

不得意…勉強、情事（耐性は十分あるが苦手なだけ）

第一話　く日常く（前書き）

いや、始まってしまいましたね。上手く描けるかガクブルですよ私……。でも頑張る！

第一話　（日常）

天気は晴天・・・そこに駒王学園の芝生に仰向けで横たわる男たちがいた。

「あゝ・・・おっぱい揉みてゝ・・・」

項垂れるように呟くこの青年の名は「兵藤一誠」。顔は良いのにスケベなことしか頭にないため女子にはモテない俗に言う残念なイケメン・・・

「・・・はあ・・・いきなり何を言い出すのです？一誠？気持ちはわかりますが。」

この物腰の柔らかい敬語口調の青年の名は一誠の唯一無二の親友、「時風篠」。この青年も顔は良いが二次元に片足を突っ込んでいてエ○ゲーマーというこれまた残念なイケメン

「兵藤一誠君に同意！」

丸刈りで若干猿顔の青年は「松田」

「言うな・・・虚しくなるだけだ・・・」

片手で眼鏡をくいっと持ち上げ冷静に話す青年は「元浜」

「篠、松田、元浜・・・どうして俺達はこの学校に入学した？」

一誠が誰に問うでもなく呟くように言う。

「我が私立駒王学園は女子校から共学になって間もない・・・よって、圧倒的に女子が多く・・・海外からの美人留学生も多数！そのため・・・男子は希少！つまり！黙っていてもモテモテなわけだ！それ即ちハーレム！」

「その通り！おっぱい溢れるリア充ライフ！」

「・・・の筈が彼女一人できないまま二年目の春を迎えちゃった・・・」

「虚しいものですね」。私も入学したての頃は結構行けそうな雰囲気

気だったんですけど・・・あなた方とエ○ゲートークばかりしていたらいつのまにか距離を置かれていましたからねえ・・・おや？」篠は何かに気づいたように運動部のランニングコースの向こうを見た。

「どうした我が同志時風よ！」

「松田君・・・いえ、ほらあそこ。」

「「ん？」」

「木場く〜ん、この後どうするの？」

「ねえ、一緒にお茶しに行かない？良いでしょ？」

駒王学園の制服を着たモブのくせにやけに可愛い女子生徒三人組が木場と呼ばれる男子生徒に話し掛ける。

「ごめん、これから部活なんだ。」

「え〜残念。」

「せっかく誘ってくれたのに本当にごめんね！また今度誘ってよ」

「「「はあ／＼／＼／＼格好良い／＼／＼／」」」

あんなベターな会話を交わすだけで女子生徒のハートを射ぬいてしまう。

「2年C組木場祐斗・・・全女子生徒憧れの対象にして・・・」

「我々全男子生徒の敵！」

元浜の言葉に繋がるように松田が言う

「くっそー！ちょっと顔が良くて頭も良くて性格が良いくらいで入れ食いしやがってー！！」

「一誠・・・十分なモテ要素なのでは？・・・」

「言うな・・・虚しくなる・・・」

元浜が悲しそうに眼鏡を直す。

「あゝ世の中不公平だよな」
一誠が項垂れていると

「お！そろそろ時間〜♪」

松田が何か荷物を持って芝生を出ようとする。

「どこにいくのですか？松田君？」

篠が問いを掛ける。

「……………むふう」

松田がまるでこの世のものでないかのようないやらしい笑みを浮かべる

「「？」」

場所は変わって体育館裏？

「村山の胸ちょーでええ〜！」

松田が興奮しながら言う

「80 70 81」

元浜が眼鏡で分析？する。

「片瀬！良い脚してんな〜」

「78 65 79」

「体育の時間、偶然見つけちゃってさ〜」

そう……この男は体育館に通じる女子更衣室に穴が空いていたのを見つけ時間を見計らって覗きをしていたのだった。

「コ〜ラ！俺達にも見せろ！」

松田のみつともなく出た尻を掴み引き出そうと試みる一誠。

「いや〜私は別に見なくていいです。フラグが立ってるんで。軍人としての危険察知能力だろうか篠は断りを入れる。」

「一人占めすんなっての！おい！！！！」

「おい！！！！」

「えっ？」

「何今の声！？誰がいる？」

「「やべっ」」

「のわあ！？」

ドサッ

覗いていた松田と元浜はいきなり突っ込んでいた体を抜き逃走を図る。

中の様子が分からなかった一誠は二人を穴から引きはがすのに夢中だったので突然二人がどいて、勢い余って倒れてしまった。

「いってて・・・ったくなんだよ松田あ！元浜あ！篠お！」

「・・・またあんたらかあ！」

怒気を含んだ声を出す女子剣道部員

「このお・・・」

「エロ猿！！！」

竹刀を一誠に向けて構える女子剣道部員達

「「ら」って・・・え？まじで？ちょ・・・待っもぎゃあああああ
あああああ！！！」

「いってて・・・竹刀で殴るかふっ・・・」

「災難だったな一誠」

「置き去りにしやがって！これでおっぱいの一つも見れたなら納得
もしようが見てもいねえのにこの理不尽・・・」

「どうしたんですか？一誠上なんか見て・・・！？」

「あ・・・」

窓の中から自分を見るのは紅髪の美女だった。

「・・・」

窓から青年たち・・・いや、一誠を見つめる紅髪の美女。

「旧校舎に人がいたんだなあ・・・」

「いいなあ・・・あの真っ赤な髪・・・」

ニヤける一誠

「リアス・グレモリー。99 58 90。3年オカルト研究部部长。出身は北欧という噂だ。」

元浜が解説する。

「グレムリン？何ですかそれは怪物ですか？」

「グレモリーだ！時風！」

「ああ、すみません」

（・・・リアス・グレモリー・・・今私が感じたものは一体・・・）

はしゃぐ三人を余所に一人だけその紅髪の美女がいた窓を訝しげに見つめる篠・・・

「気のせいですよね・・・まさか・・・人の気配がなかったなんて・・・」

「今の子・・・」

紅髪の美女がチェスの駒を手を持ちながら口を開く

「はい？・・・」

「左から2番目にいた子よ・・・それと・・・」

（人間の男はみんな私に同じような視線しか向けないけれど・・・あの糸目の子は何か違ったわね、何て言うのかしら、私を調べるように見ていた・・・眼で見るだけで全てが分かるはずなのに・・・）

「2年B組の・・・確か兵藤とかいう・・・あの男の子が何か？」

「・・・いえ、勘違いだと思うけど・・・ね・・・チェックメイト！」

この時、一誠と篠、どっちに向けて言い放ったのかは分からない。

第一話　く日常く（後書き）

ふむ・・・まあこんなもんですか・・・どうでしたかねえ。
オリ主もうちよつとセリフ入れたほうがいいすかね？
やっぱ二次小説難しいな
ではまたノシ

日常の崩壊（前書き）

小説買いました。まず一巻だけ。

気づいたんですが・・・アニメ規制しろよ（笑）

何ですかあれは、もう色々突っ込みたいですよ全く・・・

日常の崩壊

「はあ、暗い青春だ・・・このまま俺の学園生活は花もなく、おっぱいに触れることなく終わるのか。」

夕日が綺麗などある歩道橋で手すりに頬杖を突きながら佇む一誠。

「仕方ないですよ一誠。私達はモテる努力を怠っていたんですから・・・」

「モテる努力って何だ、篠？」

「・・・私にも分かりませんよ。」

「はあ」

「まあ、きっといつか良いことがありますって！」

「その言葉・・・何回聞いたり言ったことか・・・」

（こんなに落ち込んでいる一誠なんて、らしくありませんね、何か元気付けられないでしょうか・・・）

篠が思案していると・・・

「あ、あの！」

「んあ？」

「はい？」

「駒王学園の兵藤一誠君・・・ですよ・・・？少しお話したいことがあるのですが・・・」

「ん・・・はい？何か用ですか？」

（見慣れない制服だな・・・どの学校だ・・・？って可愛い）

（えっと・・・用があるのは一誠の方のようですね・・・有り得ないとは思いますが、念の為外しておきますか・・・）

「一誠、私用事を思い出したので行きますね？」

篠が気を遣いその場を退く。

「お・・・おう！じゃあな、また明日学校でな！」

「はい、さようなら一誠。それとその君も」

篠が付け足すように女の子にも別れを告げる。

「はい、さようなら。」

篠の後ろ姿が遠退いていく。

「それで、話って？」

「えっと、その・・・！・・・兵藤君って今付き合っている人はいますか・・・？」

女の子が意を決したように口を開く

「え！？別に居ないけど・・・」

一誠がバツが悪そうに言う。その言葉に女の子は

「良かった」

「ええ！？」

いきなり安堵するような発言に一誠は驚いてしまった

「あの・・・私と・・・付き合っていただけませんか？」

「なっ！？」

（ちょっと待った何だこれ何だこの状況！これは所謂告白？告白なのか！？）

「えっと・・・ごめんもう一度言ってくれる？」

戸惑いながら復唱をお願いする一誠。

「私と・・・その・・・付き合って頂けませんか・・・？」

恥ずかしそうに一誠の要望に答える女の子

「ま・・・まじすかーーーーー！？」

「オキナサイ！オキナサイ！オキ・・・」

いつもの目覚まし時計で体を起こす一誠。いつもならマンネリ化した一日が待っているのだが今日の彼は様子が違った。何故なら・・・

「ぬふふ・・・ぐふふ・・・うへえ・・・」

先日の松田の顔に負けず劣らずいやらしい笑みを浮かべる一誠。

「いやいや全然良いよ！」

「良かった」

「じゃあまた・・・！」

嬉しそうに掛けていく彼女の背中を見つめる一誠

「デート！楽しみにしてるね！」

立ち止まり、そう言う彼女・・・

「うん・・・おれも・・・」

「んー！！やったあデートデート！何ていい響きなんだ！」

歩道橋を下りていく一誠。

「ぺろ・・・」

その姿を棒アイスを舐めながら眺める小柄の少女がいた・・・

「そう・・・」

「やっぱり部長の勘は・・・？」

先程の少女が言う

「正鵠を射ていたと・・・？」

黒髪のポニーテールの美女が続ける

「あなたに見張らせていたのは正解だったようね・・・」

部長と呼ばれるその人リアス・グレモリーは言った

「部長どういたします？」

「下ごしらえだけはしておくわ・・・けど・・・あとは彼次第ね・・・」

・

「そろそろ時間なんだけど・・・」

私服で外を出歩くのはおそらく久しぶりであろう一誠はそわそわしていた

「お願いしまゝす」

街中で何か紙を配るバイトらしき女性。それを受け取る一誠

「あゝつい取っちゃった・・・ん・・・？なにになに・・・？あなた

の願い叶えます？うえっ！怪しさバリバリ・・・」

「一誠君・・・！」

「あ！おはよう夕麻ちゃん！」

紙をポケットに入れる

「ごめんね？待った？」

息を切らしながら尋ねてくる夕麻

「全然！待ってないよ！今来たところだから」

「良かった」

（くうー一度言ってみたかったんだよなこのセリフ！）

「じゃあいこうか？」

「うん！」

夕麻の手を引く一誠

夢にまで見たデートが始まる。

商店街に行き洋服を買ったりパフェと一緒に食べたり、それはもう楽しそうだった。

そして日も落ち辺りも暗くなったところ・・・

「今日は楽しかったね！」

「ああ！最高の一日だったよ！」

二人で歩きながら話す。手が触れるか触れないかの距離・・・

「ここが漢の見せ処！」

一誠は意を決し彼女と手を繋ごうと試みる。

ギュッ・・・

「あ・・・」

「やったあああ！握ったぞ！手え握ったぞ！」

手を繋ぎながら歩く一組のカップル

すると噴水があるところに来た、彼女は一誠が握っていた手をいったん離し噴水の元へ駆ける

「ねえ一誠君・・・私達の初デートの記念に一つだけ私のお願い聞いてくれる？」

「!？」

(これっでもしかして・・・キ・・・キ・・・キ・・・！)

「な・・・何かな？お願いって？」

期待に胸を膨らませながら彼女の言葉を待つ

「ふふ・・・」

「・・・死んでくれないかな？」

日常の崩壊（後書き）

疲れますね中々・・・

だげど負けません！そして次回ついに主人公が戦闘を！

戦闘描写難しそうなので不安っす・・・まじで・・・

日常の崩壊／死刑宣告／（前書き）

ではよろしくお願いします。

日常の崩壊／死刑宣告

「死んでくれないかな．．．．？」

「え．．．？」

一誠は戸惑いながら

「ごめん夕麻ちゃん．．．もう一回言ってくれないかな？俺の耳変だわ」

聞きなおす一誠

「死んでくれないかな．．．？」

（間違いない．．．俺の耳は変じゃなかった！いやでもちよつと待って．．．ええ！？死んでって．．．）

その瞬間夕麻は何か黒いものに包まれ、あつという間に布の少ない服装になってしまった

そして黒い翼を背中に生やし少し離れたところにゆっくりと着地する．．．

（は．．．ね．．．？）

（まずいことになりましたねえ．．．まさか突然死刑宣告とは．．．一誠には悪かったですが尾行しておいて正解でした．．．）

近くの茂みに隠れているのは一誠の親友．．．篠

デートの最中ずつと気配を消し二人の尾行をしていた

（何事もなければ良かったなど．．．自分に腹が立ちます！分かっていたはずです！彼女が人でないのかなど！分かっていたのにこの体たらく．．．ぬるま湯につかりすぎていましたかね．．．）
静かに自分で自分を叱咤する篠

「しかし！猶予はありません！あの女が何かをしてくる前に．．．出る！」

「楽しかったわ．．．あなたと過ごした初々しい子どものままごとに

付き合えて」

妖艶に一誠を見下す天野夕麻

「あなたが買ってくれたこれ・・・大事にするわね・・・」

「ゆ・・・夕麻ちゃん・・・」

夕麻の手には光が集束し一本の槍になる

「ーーーーー待って頂きたいですね!」

「!?!」

ガシャァン!!

どこからか鎖が伸びてきた・・・夕麻はこれを難無く後ろに跳躍し避ける

バチバチ!

錬金術による錬成反応音が鳴る・・・

「し・・・の・・・?」

一誠と夕麻の間に歩き立つのは親友の篠。一誠はまた訳が分からなくなつた

「なんで篠がここに!?!」

「すみません一誠。不躰かと思いましたが尾行させてもらいました・・・」

夕麻を睨む篠

それを余所に

「尾行・・・?なら私が気付くはず・・・この子一体・・・」

「あなたは一体何者ですか・・・?天野夕麻・・・」

「私?それをあなたに答える筋合いがあるの・・・?人間!」

光の槍を投擲してくる夕麻

ビュン!

「くっ!」

篠は片手を地面に置く

バシィ!

自分と一誠を守るようにして錬金術により鉄の壁を作りだす・・・だが・・・

バガアン！ガラガラ・・・

光の槍の投擲を防ぎ切れず鉄の壁を粉碎する。

「ぐああ！」

後ろに吹き飛ばされる篠

「あなた・・・面白いことをしているわね・・・糸目君？」

光の槍を再び集束させ構える夕麻

（鉄をも砕く槍ですか・・・しかしあんな槍見たこともありませんね・・・光ってますよ・・・正攻法では一誠に被害が及ぶ・・・！小細工をしましょうか・・・）

ヒュッ！

「！？」

身構える夕麻を余所に、先程あった噴水の傍に高速で移動する、篠は胸ポケットから布を取り出し、噴水の水に浸ける。

「何を？」

不思議そうに見る夕麻

バシィ！

ボォン！！

「何！？水煙？とんだ小細工ね！目暗ましのつもり！？」

ビュンッ！

「な！？いつの間に・・・！？」

篠は夜目が利くので水煙の中確実に夕麻の懷に接近していた

「はぁっ！！」

掌底を夕麻の腹に打ち込む！

「ぐ・・・ああ・・・」

ドゴォン・・・！！

掌底を食らい吹き飛び、噴水にぶち当たる夕麻

「はあはあ・・・く・・・手応えが少ししかありません・・・」

苦い顔をしながら言う

「本当にやるわねえぼうや・・・？面白いわ・・・けど・・・」

水に濡れた体をお構いなしに立ちあがってくる夕麻

「・・・けど？・・・はあ・・・んく・・・」

「本気を出してないみたい・・・」

「何・・・？」

「それは一体どういう意味でしょうかねえ・・・！」

怒気を含めながら言い放つ篠

「そのままの意味よ・・・あなた・・・私を殺す気・・・ある？」

「！？」

「ないでしょうねえ」

「だったら何だと言うんですか！？」

「本気にさせるには・・・これしかないわよね・・・？」

ヒュン！

槍を一誠に向けて投げる！

「まずい！一誠！！」

（動きすぎました！！あの女から一誠を背に、守るようにして闘っていたのに・・・！！くう！）

ドブシュッ！！！！

「ぐ・・・あ・・・あ・・・ぐふ！！」

ドサッ！

（一誠が・・・刺された・・・くそ・・・！！）

「一誠！！」

光の槍に刺された一誠に駆け寄る・・・

「一誠！一誠！」

「あ・・・ぐ・・・篠・・・」

「俺・・・死ぬのか？」

（この傷口は・・・くそ！何か・・・！何か手立ては・・・考えろ・・・考えろ・・・思考を止めるな！！）

「楽しかったわ・・・素敵な思い出ありがとう・・・ふふ・・・

あなたもね・・・糸目君？」

夕麻は微笑みながら言い、その場から消える

「人間には教えられないわ・・・」

「では一つよろしいでしょうか？」

「何かしら」

「あなたは先刻のあれと同類ですか？」

ピシッ！

空間が砕けたと錯覚するほど周囲の空気が変わった

「あれと同じにされるのは心外だわ・・・」

静かだが怒っている

「む・・・気に障ったのなら謝ります。なに分あなた方のような人外と対面するのは初めてでして・・・初回は許していただけですか？」

「・・・分かったわ・・・そちらの言い分も最もだし許すわ・・・でも二度目はないわよ？」

「はい。」

「それにしてもあなた物怖じしないのね・・・」
パアアアア

リアス・グレモリーの辺りが光り始める。戻るのだろう

「・・・何も聞かないのね？その子をどうしたのゝとか」

「人間には教えられないとおっしゃったのは他でもないあなたじゃありませんか・・・」

「ふふ・・・それもそうね」

リアス・グレモリーは消え、その場は二人になる

「一誠を運ぶとしますか・・・」

日常の崩壊／死刑宣告／（後書き）

う．．．．うう．．．．（泣）

全然上手く描けません．．．

戦闘描写難しい．．．

く異変く（前書き）

さて始めました。

PV数が非常にうれしいことになってますね。（自分としては）

読んでくれた方々そして訪れてくれた方々もありがとうございます！

これからもがんばります。

～異変～

「ああ・・・ねみい・・・こいつの所為で変な夢見ちまった・・・」
目覚まし時計を止める一誠

「・・・夢？」

校舎内・・・階段にて・・・

「お前らマジで夕麻ちゃんのこと覚えてないのか？」

「だから何度も言ってるんだろ？そんな子知らねえって・・・」

松田が両手を頭の後ろにやりながら言う

「第一一誠に彼女とか有り得ない・・・」

元浜がしゃがみながら言う

「・・・」

篠は無反応だ

「んなはずあるか！ちゃんとメアドだって・・・」

携帯を弄りながら確認するが

「ない・・・？夕麻ちゃんの電話番号も・・・アドレスも・・・消えてる」

「・・・！？」

三人が駄弁ついているところに階段の上から見慣れた美女が紅髪をなびかせながら降りてくる

「あ・・・」

「おっリアス先輩！」

「え？マジ！？」

「リアス先輩よ」

「いつ見ても素敵ね」

三人と同時に周囲に居た女子生徒達もざわめく
一誠の横を通る・・・

「・・・ふふ・・・」

流し眼で一誠を見ながら通り過ぎていく・・・
「・・・・・・・・？」

次に一瞬だが篠の方にも向けた

「やっぱ美人だよなあ、リアス先輩」

「うむ！あの近寄りがたい気品が如何とも何とも・・・」
松田と元浜が口を開く

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・お前A V妄想ばっかしておかしくなったんじゃない？」

「そ・・・そんなわけあるか！お前と一緒にするな！俺は確かに・・・」

「いゝから！そんなことより、今日は俺ん家に寄ってけ！秘蔵のコレクションをみんなで見ようじゃまいか！エロD V」

「やゝねあいつらいつつも」

「いやらしいことしか頭にないのよ、サイテー」
通り過ぎる女子生徒が聞こえよがしに話す

「うおっほん！」

（うおっほん！じゃありませんよ全く・・・）

場所は変わって松田の家

「変身！うふん」

「うおー！これは桃ちゃんの新作！カフェンライダーピンキー！！」

「ふふふ！入手にはちと苦労したがな」

「雰囲気盛り上げるためにも！部屋の明かりを消そう！」
パチ

部屋の明かりが消え真っ暗になる。点いているのはテレビ画面の電気だけだ・・・

「！？」

ここで一誠は自分の異変に気づいた

(視えている、光はないのに視えている・・・！)

「一誠・・・今日は帰りましょうか？体調も優れないようですし・・・」

「篠・・・？・・・ああ・・・そうだな篠の言うとおりで・・・」

「私も帰るつもりでしたからね。」

「？、そうなのか？」

「はい、聞きたいこともありますし・・・ね」

松田と元浜に途中で帰ると告げ松田の家を出た一誠と篠・・・

始めに篠が切り出す

「一誠・・・実は私も一誠と同じ夢を見ました・・・否、ここまでくると夢ではないかもしれませんが」

「どんな夢だった？」

「私が・・・一誠と天野夕麻のデートを尾行していて、天野夕麻があなたを殺そうと光る槍を手持ったところで私が出てきました」

「それで・・・？」

「私は闘いました」

「錬金術も使ったのか？」

「ええ・・・使いましたが・・・」

「私の所為で・・・一誠が・・・」

悔しそうに下唇を噛む篠

「そうか・・・俺・・・死んでたか・・・」

「ですが・・・不可思議。何故あなたが生きているのか、ここで立って話しているのか」

「そうなんだよな」

一誠が困ったように頭を掻く

話しながら歩いているといつの間にか人気がないところに出た・・・

(ここは・・・覚えている・・・ここは覚えている！)

(ここは・・・噴水・・・同じですね・・・)

「くそ！何だっただよ！」

一誠がいきり立つ

「ここ・・・覚えがありますよね？一誠・・・」

「ああ・・・覚えてる・・・夕麻ちゃんとの最期のデート場所・・・
そして・・・」

『「俺」「あなた」が死んだ場所・・・』

ゴオオオオオオ！

「！？」

二人が突風を感じる

「これは数奇なものだ・・・こんな都市部でもない地方の市街で貴様のような存在に会うのだからなあ」

（何言っただこいつ頭イっちゃってんのかおい！？でもなんか震えが止まらねえなんだあれ！）

（この気配・・・やはり同じですね・・・！）

「ふふ・・・！」

「！？」

ビュウウウウ！

「なんだこれ！？ちょっと退がっただけなのに！」

一誠は数十メートル先に居る変なおっさんに恐怖を感じ後ずさったが、予想外にも跳躍し空を飛んだかのように後ろに退がり着地した
「一誠・・・やはりもう・・・人ではないようで・・・しかし！私の親友というのは変わりありません！親友に人間も化け物もかんけいありません！」

「う・・・く・・・」

一誠は恐怖で動けない

「逃げ腰か・・・」

おっさんがつまらなそうに言う

「訳わかんねえよ！」

「一誠、あなたは先に・・・でもう行ってる！？」

もうすでに親友は逃げていた・・・

「やれやれ・・・こういうときは流石といったところでしょか・
・なら・・・!・・・!??」

居ない・・・

自分の目の前に居たはずのおっさんが・・・

「まさか!」

「はあはあ・・・く・・・はあはあ・・・」

全速力で走る一誠

パサ・・・

「羽・・・? 夕麻ちゃん!? うわあ・・・ぐ!」

おっさんが飛んできて一誠の目の前で着地する

(追いつかれた・・・?)

「下級な存在はこれだから困る・・・」

「また夢かよ・・・!」

「夢・・・? ふっ、主の気配も仲間の気配もない、消える素振りすら見せず魔方阵すら展開しない・・・貴様・・・はぐれか?」

手に見覚えのある光る槍を集束させる・・・

「ならば殺しても問題あるまい。」

「うわあ!!」

「ぬ!??」

ドッカアアアアン!!

おっさんの足元が爆発した

「これは・・・? 何だ? 魔法でも神器セイグリッド・ギアの力ではないな・・・!」

爆発させた主が姿を現す・・・

「親友を二度も殺される訳にはいかねえよおっさん!!」

糸目だった眼を半開きにしておっさんを睨みつけるのは篠だった

(殺られるわけには・・・殺られるわけにはいかねえんだよ!・・・

・俺はあの時学んだ! あの女と同様! 殺す気で殺らなければなら
ない!)

「ほお・・・これはまた・・・人間が悪魔の味方をするか・・・」

「俺が・・・悪魔？」

「話は後だ一誠！とりあえず・・・こいつを倒す！！お前は退がってろ！」

（退がってろ・・・か・・・俺は以前、こんな偉そうなことを言っ
て死なせたんだな・・・）

自分で自分の言ったことを嘲笑する

（もう迷わねえ！行くぜ！久しぶりの錬金術フル回転だ！）

両手を合わせ地面に手を付く・・・

バシィ！

おっさんの周囲を取り囲むようにして爆発の火柱を上がらせる

ドオオオオオオン！！

「ぬ・・・これは・・・現代の人間の兵器・・・爆弾か？何故こんなところで爆発が！？」

（いやぁ・・・久しぶりに使ったが・・・良い音だ・・・相変わらず・・・）

篠は戦場に居る時のことを思い出して耽っていたがすぐに

（駄目だ駄目だ・・・！今は一誠を守ることを先決に考えるか）

バシィ！！

再び錬成を始める篠。今度は地面から巨大な大砲を出現させて砲撃した

ドンッ！ドンッ！！

「ぬう・・・！」

避け続けるおっさん

（ここだな・・・）

バシッ！

おっさんの足元の地面を錬成で少し盛り上がらせる

「ぬっ！？何い！？」

おっさんは盛り上がった地面を把握できず態勢を崩す

（そこだぁ！）

ドッガアアアアアアアン！！

「ぐうううあ!!」

砲撃がおっさんに直撃した。

「お・・・おのれ・・・人間風情・・・が調子に乗りおって・・・」
地面に手を付き、篠を睨めつけるおっさん

「貴様・・・一体何者だ・・・!! 何だあの不可解な術は・・・」
魔界にもあんなものはない!!」

「俺としてはあんたの方が不可解だよ・・・何ださっきの光る槍・・・」
ファンタジーもいい加減にしろってんだよ」

無言で睨みあう両者・・・そこに

「その子に触れないで頂戴」

背後に突然現れそう言いながら篠の横を通り過ぎていくのは紅髪の美女・・・

一誠も気づいた

「・・・紅い髪・・・グレモリー家の者か・・・!」

おっさんが憎々しげに紅い髪の女性を睨みつける

「リアス・グレモリーよ。ごきげんよう、堕ちた天使さん。この子のちよっかい出すなら容赦はしないわ・・・」

リアス・グレモリー。

そう・・・彼女は自分達の学校の先輩。あの紅い髪の美人だ・・・
そこで一誠の意識は途切れてしまった

それに続くように黒髪ポニーの美女と小柄の少女も歩いてくる

「・・・ふふっ。これはこれは。その者はそちらの眷属か・・・この町もそちらの縄張りだったということか・・・まあいい・・・。今日のことは詫びよう・・・だが、下僕は放し飼いにしないことだ。私のようなものが散歩がてら狩ってしまうこともあるやもしれんぞ・・・?」

「ご忠告痛み入るわ。この町は私の管轄なの・・・私の邪魔をしたらその時は容赦なくやらせてもらおうわ」

「その台詞・・・そっくりそのまま返そう・・・それと・・・」
おっさんが篠の方を向く・・・

「そちらの倒れている小僧よりその人間の小僧の方が良い下僕になるかもしれんぞ？」

「それもそうだけれどこの子には特別な力があるのよ・・・」

「ほう・・・？それは？」

「あなたに教える義理があつて？」

「ふむ・・・まあ良い・・・人間の小僧、勝負はまた今度だ・・・」

「え・・・嫌だよ・・・今回はこっちの手札は伏せてあったから良かったもの・・・次会ったら対策練られちまうよ・・・」

「それを言ったらこちらもそうだが？」

「・・・」

「だんまりか・・・まあ良い・・・グレモリー家の次期当主よ。我が名はドーナシーク再び見えないことを願う・・・」

黒い光を灯しおっさんは消えていく・・・

「また会ったわね・・・糸目のぼうや・・・」

「♪♪♪」

聞こえない振りをして現実逃避する篠

「全く・・・じゃあ全部教えてあげるわよ？私達のこと・・・」
「!？」

篠が三人に振り返る

「この子も何とかしてあげなくちゃいけないし・・・」
「気絶している一誠を指差して言う」

「は・・・分かりました・・・従いましょう、どうぞその馬鹿を連れて行ってください」

諦めたように言い放つ

「じゃあ連れていくわね？明日学校で使いの者をよこすから・・・」
「はいはい」

（彼女ならば平気でしょう・・・一誠を殺すならあの時点で手を下していたはずですからね・・・）
そう思いながら三人の女性に背を向け手を振る篠

「部長・・・？あの糸目の子、行かせて良かったんですの？」

黒髪ポニーが尋ねる

「大丈夫よ・・・彼はこの子と親友らしいし・・・放っとくような真似はしないでしょ？」

「それじゃあ私はこの子とやらなきやいけないことがあるから、あなた達は先に帰っていて？」

「分かりましたわ」

「・・・」

リアスの言葉に頷く黒髪ポニーと小柄な少女

時風篠と兵藤一誠・・・この二人の日常は完全に崩壊した・・・

ゝ異変ゝ（後書き）

オワタ！

主人公に神器を与えようか迷っています・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4373ba/>

ハイスクールD×D～紅蓮の錬金術師～

2012年1月13日17時52分発行